OTA FINE ARTS
オオタファインアーツ | 106-0032 東京都港区六本木 6-6-9 ピラミデビル3F | telephone 03 6447 1123 | facsimile 03 6447 1124 | 3F, Piramide Bldg., 6-6-9, Roppongi, Minatoku, Tokyo, 1060032 Japan | telephone +81 3 6447 1123 | facsimile +81 3 6447 1124
www.otafinearts.com

Press Release

CAMP

嶋田美子＋ブブ・ド・ラ・マドレーヌ
ミン・ウォン
ウォーターメロン・シスターズ
［西瓜姉妹］（ユ・チェンタ＋ミン・ウォン）
ユキ・キハラ

2025 年 3 月 15 日（土）−5 月 10 日（土）
11:00 - 19:00
日・月・祝 休廊

オープニング・スペシャルトーク
3 月 15 日（土） 16:00–17:30
嶋田美子＋ブブ・ド・ラ・マドレーヌ
with 大坂紘一郎
（キュレーター／ASAKUSA ディレクター）

オオタファインアーツは、嶋田美子＋ブブ・ド・ラ・マドレーヌ、ミン・ウォン、ウォータメロン・シスターズ［西瓜姉妹］（ユ・チェタ＋ミン・ウォン）、ユキ・キハラによるグループ展「**CAMP**」を開催いたします。今展に参加するのは、社会構造に対する鋭い批評眼を煌めかせ、知性に基づくリサーチを重ねてきたアーティストたちです。既に十分なキャリアを持つかれらは、知性を上回る感性の炸裂が、アートの実践においていかに強く人々の心を動かすかを熟知しています。そのかれらに共通して見られる感覚、それが CAMP（キャンプ）です。様式（ルビ：スタイル）のやりすぎた誇張、ものや人々のなかに見出せる人工性。キャンプはそういった不自然さを愛好します。クィアを自認するかれらにとって馴染み深いこの審美主義は、多様な理念のもつれが人々をがんじがらめにしてしまうこの時代にあっても、何食わぬ顔で大胆不敵な自己主張を繰り広げます。

ミン・ウォン
《Ming Wong as Susan Wontag》
2024 年

「キャンプ」の特徴を定義したスーザン・ソンタグのドラァグ・ヴァージョン、「スーザン・ウォンタグ」は、これまでも映画の登場人物等をクィアな手法で演じてきた**ミン・ウォン**の新たなオルターエゴです。グレタ・ガルボが何を演じてもグレタ・ガルボ自身でしかないように、ソンタグもまた、どのイメージを見ても知的で洗練されたソンタグ自身でしかありません。その強い一貫性において彼女自身もキャンプ的と言えますが、彼女とは明らかに異なる要素を持つウォンが、そのスタイルを真面目に演じれば演じるほど、キャンプの度合いは増大します。ウォンタグは今展の象徴的存在であり、私たちをキャンプの世界へと先導するメンターの役割を果たします。

ユキ・キハラ
《Salofa》
(「酋長の娘」シリーズ)
2025 年

サモアと日本の血を引く**ユキ・キハラ**は、ベネツィア・ビエンナーレ 2022 におけるニュージーランド館の「パラダイス・キャンプ」展で名を馳せます。サモアの伝統的な第三の性「ファファフィネ」がゴーギャンの絵画のドラァグを展開した作品は、未だ無邪気に植民地主義的視線を南太平洋に向ける先進国に、痛烈な皮肉を突き返しました。新作《酋長の娘》シリーズは、南洋植民地を歌った戦前の流行歌のタイトルを冠し、南方の島の人々を人種差別的に誇張したヴィンテージ人形を用いた作品です。褐色の腕が貝殻から不気味に突き出る様は、海洋汚染や気候変動がもたらす不吉な未来を暗示します。南国の楽園を象徴するはずだったユニークな貝殻とキャンプな人形は、異形の姿となって私たちの身勝手な妄想を小気味よく裏切ります。

嶋田美子＋ブブ・ド・ラ・マドレーヌ《明治怒羅亜愚反帝戯画双六》（部分）2024 年

嶋田美子と**ブブ・ド・ラ・マドレーヌ**は「明治時代」をクィアします。明治とは、政府が大真面目に西欧列強のパロディを展開した極めてキャンプな時代です。洋装した男女が舞踏会“的なもの”を演じた鹿鳴館は、その象徴的アイコンのひとつと言えるでしょう。ふたりは 1998 年以来の共作として、黒船来航をふりだしとする錦絵風スゴロクを発表します。ドラァグ・クイーン／キングとしての経験豊かなふたりが明治期の様々な人物を誇張し散りばめたスゴロクは、日清・日露戦争、近代化とマスを進め、帝国主義を築いて上がりとなります。ふざけたイメージのコラージュは、それを見て笑う私たちに問います。帝国主義は過去のものか。ガザ問題の根源にある西欧の帝国主義は、その西欧を真似た大日本帝国主義は、終わったことか。手練れの彼女たちは、今こそ向き合うべき問いをキャンプに呈示します。

ウォーターメロン・シスターズ
《Roppongi Diary》
2025 年

もうひとつのユニット、**ミン・ウォン**が台湾作家**ユ・チェンタ**と組んだ「**ウォーターメロン・シスターズ**」は、様々なカテゴリーで境界を巡り争う人間に愛を広めるため、天から舞い降りたクィア姉妹として活動します。ポップカルチャーの歴史を通して女性性のステレオタイプを愛嬌たっぷりに演じてきたかれらは、2024 年の「六本木アートナイト」で此の地に降臨しました。振袖におみやげ品の和傘、加えてギャル風ドラァグメークという見事な日本風キャンプで街を練り歩き、昭和歌謡ショーを披露した姿はこの上なくクィアですが、それを見る人々の心からの笑顔にかれらが目指す世界が垣間見えます。奇しくもスイカの色が特別な象徴性を帯びてしまった今、その活動は多くの虐げられた人々への連帯のメッセージとして一層輝きます。

世界は今、強国による新たな帝国主義的ふるまいにより混迷を極めています。しかし世界の不安をよそに、悲劇性を好まぬキャンプはアイロニー全開で独自の美学を貫き、混沌のなかを突き進みます。かれらアーティストたちにどうしようもなく惹かれてしまうのは、その自立したエレガントな強さに、そして誰もが持ち得ているのではないその感性に、憧れを抱かずにいられないからでしょう。ソンタグが『Notes on ‘Camp’』を記してから 60 年を経た今も、キャンプは私たちを強く魅了します。

［**ミン・ウォン**］ 1971 年シンガポール生まれ。ベルリン在住。パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションの手法を用いてワールドシネマやポピュラーカルチャーに新たな解釈を与えるウォンは、人の行うパフォーマティブな行為を考察することで「真正性」や「オリジナリティ」の概念を紐解いていく。第 53 回ベネツィア・ビエンナーレ（2009 年）でシンガポール代表に選出され、審査員特別表彰を受賞。近年の主なグループ展に「Signals: How Video Transformed the World」ニューヨーク近代美術館（2023 年）、「Global(e) Resistance」ポンピドゥーセンター［パリ］（2020 年）、 「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980 年代から現在まで」福岡アジア美術館／森美術館［東京］／国立新美術館［東京］（2017 年）、「ゼロ年代のベルリン」東京都現代美術館（2011 年）。現在、国立国際美術館［大阪］で開催中の「ノー・バウンダリーズ」に作品を出展中。

［**ユキ・キハラ**］ 1975 年アピア［サモア］生まれ、アピア在住。日本とサモアにルーツを持つインターディシプリナリー・アーティスト。様々なメディアによるビジュアル・アートを手がけるほか、キュレーターとしても活動。リサーチに基づいたアプローチを通じて、支配的で一方的な歴史的ナラティブに異議を唱える。第 59 回ベネツィア・ビエンナーレ（2022 年）のニュージーランド館で話題となった「パラダイス・キャンプ」展は、シドニー（2023 年）、サモア（2024 年）を巡回し、3 月 15 日からはイギリス・ノーウィッチの Sainsbury Centre で新バージョンの「Darwin in Paradise Camp: Yuki Kihara」が開催される。主な個展に「Undressing the Pacific: Mid-Career Survey」オタゴ大学［ニュージーランド］他（2013 年）、「Living Photographs」メトロポリタン美術館［ニューヨーク］（2008 年）。国際ビエンナーレ、トリエンナーレへの出展多数。

［**嶋田美子＋ブブ・ド・ラ・マドレーヌ**］ 1959 年東京生まれ、千葉県在住のアーティスト兼美術史研究家、嶋田美子と、1961 年大阪市生まれ、奈良県在住のアーティスト、ブブ・ド・ラ・マドレーヌのふたりによるアーティスト・デュオ。1997 年にオオタファインアーツでデュオ展「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」を開催。その後、ふたりのデュオ作品は、「Fanatic Heart」Para Site［香港］（2022-2023 年）、「Japan Unlimited」MQ ウィーン（2019 年）、「どないやねん！」フランス国立高等美術学校［パリ］（1998 年）など、海外の多くの展覧会で展示されている。ブブ個人の作品は、現在、国立国際美術館［大阪］で開催中の「コレクション２　Undo, Redo わたしは解く、やり直す」に出展中。

［**ウォータメロン・シスターズ（西瓜姉妹）**］ 1983 年台南生まれ、台北在住のユ・チェンタ（余政達）とミン・ウォンによるアーティスト・デュオ。2017 年にウォーターメロン・シスターズ（西瓜姉妹）としてコラボレーションを開始。1960 年代の京劇映画やツァイ・ミンリャン（蔡明亮）の映画作品からインスピレーションを受け、自らの性自認を流動化させ、クィア姉妹として人間の性的解放への道をアートや音楽、ダンスで応援すべく、パフォーマンスや映像作品制作を行う。「六本木アートナイト 2024」六本木各所（2024 年）、「国際芸術祭あいち 2022—STILL ALIVE」愛知県各所（2022 年）に参加。

オオタファインアーツ
東京都港区六本木 6-6-9 ピラミデビル 3 階
03-6447-1123　info@otafinearts.com　www.otafinearts.com

担当：池田あかね ikeda@otafinearts.com